

1. 挨拶 ー秋を感じるー

暑すぎた夏がようやく涼しさを感じる秋になってきたのでしょうか、コオロギの音も涼やかに聞こえる。9月は旧暦の8月。中秋の名月にススキ・月見団子・秋の実りを盛りつけた台の隣で、秘伝豆をかじりながら杯を傾ける。風流である。秋の七草も季節を感じるものである。正月の七草は食べる花だそうだが、秋の七草は花を愛でるものという。七草の中でも目立たないのが葛の花、大きな葉の陰に隠れていて顔をちょこんと出しているのがオオツいたかという感じになり嬉しいものです。

残念ながらこの季節には体力の衰えを感じる頃でもある。秋祭りの賑やかな拍子や、子供達の運動会の大きな音に誘われ、思いっきり体を動かしたいと手始めにと、ラジオ体操をするだけでも関節が思うように動かせないことに気が付く。季節が移るということはまた一つ老いてゆくということ。この移ろいに負けないよう関節は柔らかに保ち、季節を快く楽しめるよう日常活動に精出そう。

2. 今年度の企画事業

1 組企画 『KOTO ワイン盛岡』見学会

1 日 時：8月29日（木）午前10時15分～午前11時30分

2 集 合：盛岡バスセンター（水戸谷さんの車で移動）

3 参加者：3名（馬場、水戸谷、宮下）

4 【株式会社 KOTO ワイン盛岡（盛岡市乙部。吉田千尋代表取締役）】

KOTOは地元地区の「黒川（K）」、「乙部（O）」、「手代森（T）」、「大ケ生（O）」の頭文字です。同社は地域の耕作放棄地を活用して栽培したブドウで、地元産ワインを醸造することを目的に2021年に設立され、2023年12月に最初のワインを販売した若い会社です。乙部地区は県内有数のリンゴ産地ですが、高齢化などにより離農が進み、耕作放棄地が増えるなどの課題があったことから、同社代表の母である吉田ひさ子さん（有）につかいわてコミュニティー企画代表取締役、岩手日化サービス(株)相談役）らが地元企業約30社で「地元企業ネットワーク」を2010年に立ち上げ、地域活性化の取り組みを行ってきました。そのような活動をベースに、ひさ子さんの娘の千尋さんが中心となって耕作放棄地でのブドウの栽培、そして地元産ワインの製造へとつながっています。「KOTO ワイン盛岡」の設立をもって、「地元企業ネットワーク」は解散しました。また、（有）いわてにつかコミュニティ企画が運営する「めだかの園」（就労継続支援B型事業所）と連携し、入園者の皆さんに農園作業や醸造作業で手伝ってもらっている等、地域に溶け込んだ事業活動に注目されます。

5 【見学内容】



ブドウ園



醸造所兼店舗

6名の参加予定でしたが、3名が事情により直前で参加できなくなり、3名での見学となりました。はじめに、同社代表の父母である吉田廣身さん（岩手日化サービス(株)会長）とひさ子さん（前掲）にぶどう栽培の圃場を案内して頂きました。圃場は5カ所で、2.3haあるとのことでした。今回は、4か所を案内して頂きました。古い圃場は7年目ですが、新しい圃場はまだ数年しかたっており、これからの生長が楽しみです。その後、醸造所（兼店舗）に戻り吉田千尋代表に施設の案内をして頂きました。こじんまりとした醸造所ですが、①タンク室、②瓶詰室、③倉庫（ラベル貼り作業も行える）、④分析室、⑤販売店舗など、必要な設備がコンパクトに配置されていました。

最後に、店舗スペースで3種類のワインを試飲させていただきながら、千尋代表とひさ子さんと意見交換をさせて頂きました。KOTOワインは甘口の飲みやすいワインに感じました。今年は、これから醸造作業に入り、12月には製品が販売されるということです。「シニアの会」の会員の皆さんにも、是非ご賞味願えればと思います。

在庫状況や購入方法などは同社ホームページ（<https://koto-wine.com>）で確認可能。
（宮下記）

3. 会員の移動

退会会員 小櫻忠夫さんが退会されました
入会会員 なし

4. コラム 『前九年の役について考える』

東北の歴史をさかのぼっていくと、必然的に「前九年の役」と「後三年の合戦」に行きつくと思う。平泉の文化が開花する前の時代である。この内容は高橋克彦著の「炎たつ」でNHKの大河ドラマとして1993年に放映されたので、知っている方も多いと思う。まずは「役（えき）」と「合戦（がっせん）」の違いは何かを補足しよう。「役」はその時の国家を統制していた朝廷への反乱を言う。そして「合戦」は朝廷には関係ない私的な争いをさすようだ。従って前九年の役は対朝廷に対する反乱、後三年の合戦は単なる地方の私的な争いという事になる。さて、今回は「前九年の役」を、少し掘り下

った。源頼義の陸奥守着任後まもなく、「後一条天皇」と「後朱雀天皇」の生母である「上東門院 藤原彰子」が重篤な病に陥る。その弟であった源頼通と源教通らは、病氣回復祈願のため「大赦」を奏請(そうせい:天皇に申し上げて許しを請うこと)した。これによって、安倍頼良が朝廷軍を撃退した罪も免罪となり、前九年の役が一時停戦となった。この頃、「奥六郡」の俘囚長(ふしゅうちょう:陸奥や出羽の蝦夷のうち、朝廷の支配に属する者)であった安倍頼良は、朝廷に対して恭順の意を示すようになり、また將軍の「頼義」と同音であることを恐れ多いとし、自ら「頼時」に改名したと言われている。源頼義が陸奥守兼鎮守府將軍を務めている間、安倍頼時も税を納めるようになり、源頼義を饗応するなど、ひたすら恭順の意を示していた。しかし、源頼義の陸奥守としての任期が満了する1056年(天喜4年)、源頼義は、鎮守府の「胆沢城」で任務を引き継ぎ、国府の「多賀城」に向かう途中、阿久利川(あくとかわ)のほとりで野営した際、部下であった権守「藤原説貞」(ふじわらのときさだ)の子「藤原光貞」の野営に何者かが乱入し、夜襲を受けるという事件が発生した。源頼義が心当たりのある犯人を尋ねると、藤原光貞は、「はっきりとは分からなかったが、先年、安倍貞任(あべのさだとう:安倍頼時の息子)が、私の妹を嫁に欲しいと言ってきたが、卑しい俘囚だったため断りました。きっと安倍貞任の仕業に違いありません」と告げた。これを聞いた源頼義は、安倍貞任に出頭を命じるが、安倍頼時が「一度罪を許され、服従しているのになぜそのようなことをしようか。もし攻め入ってくるようなら、私達は死を覚悟で徹底抗戦する」としてこれを拒否。源頼義は、安倍氏「謀叛」と朝廷に報告し、再び戦が始まることとなった。(ただし、この「阿久利川事件」には陰謀説がある。安倍氏側には、任期の切れる源頼義を討つ理由がなかった。そのため、陸奥国の支配権を狙っていた源頼義が、夜襲をかけられたとして挑発したのではないかとする説と、藤原説貞(光貞、元貞の父)など反安倍氏の在庁官人による謀略説などがある。1056年(天喜4年)8月、「安倍頼時追討令」が発令され、前九年の役、戦いの火蓋が切って落とされた。源氏軍には、関東武士団や地元の豪族も参加しており、その中に、安倍頼時の娘婿である「平永衡」(たいらのながひら)と「藤原経清」(ふじわらのつねきよ)がいたが、平永衡は安倍氏への内通を疑われ、源頼義に斬殺された。これを見た藤原経清は身の危険を感じ、「安倍氏が奇襲を図り、源頼義以下の妻子を襲う」と流言を放ち、混乱に乗じて安倍軍に寝返った。安倍軍に加わった藤原経清の参戦により、安倍軍は朝廷軍を苦しめることとなった。その後、源頼義と安倍頼時の一進一退の攻防が続き、不利な戦いを余儀なくされた源頼義は、「夷は夷をもって制す」(他国同士を戦わせて自国の利益を得る)として、現在の岩手県北部から青森県東部にかけて勢力を持っていた「安倍富忠」を味方に引き入れることに成功したのである。安倍頼時は、他の蝦夷が源頼義側に付かないよう阻止しようと

しますが、安倍富忠のもとへ説得に向かった安倍頼時を安倍富忠の兵が不意打ちに急襲し、奮戦の中で流れ矢にあたった傷がもとで1057年(天喜5年)7月26日に安倍頼時は死去した。しかし、この安倍頼時の死は、安倍氏の団結を強固なものにし、息子の安倍貞任に総大将が代わってからも、戦いは5年間続くこととなった。

1057年(天喜5年)11月、「黄海の戦い」(きよみのたたかい)が起こる。源頼義は陸奥国府から出陣し、安倍貞任に決戦を挑みた。安倍貞任は河崎柵に兵力を集め、現在の岩手県一関にあたる「黄海」(きのみ)



【黄海の合戦古戦場跡】

の地で源頼義軍を迎撃。冬期の遠征で疲弊し、補給物資も乏しく、兵力でも劣っていた源頼義軍は大敗を喫した。源氏軍は数百人の兵を失い、一時は「源頼義討ち死に」と伝えられたほどだったが、この窮地を救ったのが、嫡男の源義家だった。「八幡太郎」(はちまんとろう)の愛称で知られていた源義家は、文字通り獅子奮迅の活躍を見せ、父・源頼義とわずかに残った兵と共に、安倍軍から逃れることができた。黄海の戦いの敗戦により、自身の持つ兵力に痛手を負った源頼義であったが、数年を経て、陸奥守の任期が再度終わり、のちに再々任されることになると、安倍氏と並ぶほどの権力をもった出羽国の俘囚「清原光頼」に味方になるよう接近。源氏方に加担することに対し、なかなか首を縦に振らない清原氏だったが、源頼義が贈り物を送るなど、三顧の礼を尽くし、ついには味方とすることに成功した。強大な力を持つ清原光頼を味方に付けたことにより、これまでの安倍氏有利の状況が一転。清原光頼の弟「清原武則」が総大将となり、10,000余りの軍勢を率いて、安倍軍に対し果敢に攻め入り、「小松柵の戦い」や「衣川関の戦い」を次々に勝利し、安倍氏終焉の地となった本拠地「厨川柵」へ追い詰め、安倍貞任を打ち破ったのであった。1062年(康平5年)9月17日、厨川柵(盛岡市天昌寺町)と、姫戸柵(盛岡市安倍館町)が陥落、総大将の安倍貞任は戦で負った傷のため、命を落とした。朝廷側より寝返った藤原経清は、苦しみを長引かせるため、わざとなまめた日本刀での斬首刑となった。これにより、1051年(永承6年)から1062年(康平5年)の長い前九年の役は、ようやく終わりを迎えたのであった。康平5年12月17日(1063年1月19日)頼義は騒乱鎮定を上奏。康平6年2月25日(1063年3月27日)に頼義は「四位上臈」と呼ばれる受領の最高峰であった正四位下伊予守となった。これは朝廷が頼義に対して最大級の功績を認めたこととなる。阿部貞任の弟宗任らは伊予国、後に筑前国宗像に流された。一方清原武則はこの戦功により朝廷より従五位上に加階(武則は元から従五位下であった為)の上、鎮守府将軍に補任されて奥六郡を与えられ、清原氏が奥羽の覇者となったのである。経清の妻であった頼時の息女は夫と兄の敵として戦った武貞と再嫁し、経清の遺児(後の藤原清衡)共々清原氏に引き取られた。これが「前九年の役」のエピローグであると同時に、「後三年の合戦」へと続くプロローグであった。そして、平泉の黄金文化が開いていく第一歩であったのである。

「厨川柵」は、前九年の役において、安倍貞任、藤原経清の終焉の地となった場所で

ある。この厨川柵は現在の盛岡市安倍館町の北上川沿いの安倍館遺跡を中心にかなり広い範囲で存在したようで現在は擬定地となっている。この安倍館遺跡は江戸から明治時代までは厨川柵とされていたが、大正以降では安倍館、里館を含む広範な地域を厨川柵あるいは姫戸(おぼと)柵とする見解が示されている。現存する遺跡は、鎌倉時代の地頭で安土桃山時代までこの地を領した工藤氏の居館で、天正(てんしょう)20年(1592)に廃城となった中世厨川城と15世紀前半には成立していた厨川館、および城館が破却されて以降の近世下厨川村の遺構と考えられる。この周辺には、「前九年」、「安倍館」、「厨川」の地名が今でも町名として残存している。いずれにしても、昔から東北地方は蝦夷(エミシ)などと呼ばれ、中央政権からは卑下されていたにもかかわらず、豊かな資源(金、木炭、農産物等)に恵まれていたため、比較的自由に平穏に暮らしていた、そこに朝廷が利権欲しさに、ずかずか乗り込んできて朝廷に従えと脅し、武力で強引に従わせていった、東北人にとっては納得いかない虐げられた戦いであったと考えるのは筆者だけであろうか？最後に区界にある兜明神岳(かぶとみょうじんだけ)界限に、阿部貞任埋蔵金伝説があるそうだ。これは戦いに敗れた地方豪族の将来的な復活・再興を信じて密かに財宝を残そうとしたか、戦いの中形成が不利となった時、敵側に知られることなく資金源を確保し、奪われる前に秘匿するのが、自然の流れと考えると、この埋蔵金伝説はあながち伝説という事では済まされない、妙な信憑性を感じざるを得ないのは、筆者だけであろうか？まさに新たな歴史ロマンである。

5. 新たな会員の募集について

新規会員の紹介をお願い致します。会員増は会員の皆様の人脈だよりです。

本会報を使っても構いませんので、お知り合いの方へのお声かけお願いいたします。

連絡先 事務局 志田満

携帯 090-2791-1803 e-mail mitshida.9201@gmail.com

6. 編集後記 「夏祭り」

テレビ、「盛岡さんさ踊り」が盛況のうちに終わったと報道されていた。ひと昔前ならいよいよ夏も終わりになり、お盆が明けると一気に秋めいてくる季節であったが、昨今はこれから夏本番となってきている。そんな中、気仙沼市市の港祭りのニュースで「はまらいんや踊り」というものを紹介していた。「はまらいんや」とは気仙地方の方言で、「一緒になろうとか、仲間に入って」とかの意味である。はまる=加わる、らいんや=何々して頂けませんか？ となっており、ケセン国出身の筆者としては、妙に懐かしい響きであった。これからお盆にかけて花火大会や、地域の盆踊りなどが開催されてくるようだが、また「コロナ」が増えているそうだ。密になることが多くなってきましたが、マスク、手洗い、うがい等で気を付けていきたいものだ。

志田